

6年半で入館者100万人達成 東京農大「食と農」の博物館

10月14日、東京農大「食と農」の博物館の入館者が100万人目を達成した。100万人目になったのは寺田恵美子さん（世田谷区上用賀在住）。薬玉で祝ったあと、小泉幸道館長から特製のクリスタルの置物と佐渡の朱鷺米10kgが、東京農大生協から農大グッズなどが贈られた。寺田さんは「突然のことでしたが、うれしい驚きです」などと語った。

同博物館は東京農大世田谷キャンパスから近い馬事公苑正門前のけやき広場に面して、2004年4月にオー

プンした。設計は、建築家の隈研吾氏。入館者100万人達成は6年半ぶりとなる。

博物館1階では農大の研究成果などの企画展示を行い、2階には農大OBの蔵元の日本酒と、珍しい酒器などが常設展示されている。また、隣接のバイオリウムは財団法人進化生物研究所が管理する大型温室で、アフリカ・中南米の植物のほか、マダガスカルのレムール（キツネザル）など、貴重な動植物を観察することができる。いずれも入場無料。

新たな企画展示2件

<環境共生学の祖 近藤典生の世界展>

10月15日から東京農大「食と農」の博物館で、「環境共生学の祖 近藤典生の世界」展が開催されている。2011年3月21日まで。

東京農大名誉教授であった近藤典生博士（1915-1997）は、1950年に同大育種学研究所を創設。さらに同研究所を財団法人進化生物学研究所として拡充させ、長くその理事長を務めた。

博士は世界36か国を回り、50万点もの生き物（植物、動物、魚、昆虫）、化石などを収集した。そして、新しい学問分野として「環境共生学」を主導、生物学的、生物資源的、農学的見地に立ちつつ、人口、食糧、農業、環境など幅広い分野を研究し、提言と活動を実践してきた。

本展では、各種パネルのほか、絶滅した巨大な鳥エピオルニス・マキシムス（ダチョウの仲間・走鳥類）の骨格標本（レプリカ）やマダガスカルの子猫標本、博士愛用の机などが展示されている。生き物全般への愛情と関心から社会貢献に向かった博士の、人生への姿勢を感じてもらいたいと関係者は願っている。

<広がる機能性食品展～私たちの健康を支える科学と産業のコラボレーション～>

11月19日から東京農大「食と農」の博物館で、「広がる機能性食品展～私たちの健康を支える科学と産業のコラボレーション～」が開催される。2011年3月21



エピオルニス・マキシムスの骨格標本（レプリカ）

日まで。

高度経済成長以降、食生活が豊かになった反面、過食や偏食がなど食生活の乱れも目立つようになり、その結果、メタボリックシンドロームや、がん、アレルギー・感染症などの原因となる免疫不全が社会問題として浮上してきた。機能性食品は、病気の一次予防の助けとなる非栄養性成分の生理学上の機能が効果的に表れるように設計され製造されている。また、厚生省は、厳格な審査に合格した機能性食品を特定健康用食品（トクホ）の名で認可する制度を設けている。

東京農大では2000年から文科省の助成を受け、この分野をリードする約30名の研究者により研究活動を展開している。本展では、トクホに関する展示などのほか、試食会や講演会も行われる。

問い合わせは、同博物館（TEL03-5477-4033）まで。